

ケーススタディ



企業情報

パーソルキャリア株式会社
〒100-6328
東京都千代田区丸の内2-4-1 丸の内ビルディング27F

事業内容：人材紹介サービス、求人メディアの運営、転職・就職支援、採用・経営支援サービスの提供



デジタルテクノロジー統括部
デジタルソリューション部 CODグループ

リードエンジニア 寺本 孝太氏



デジタルテクノロジー統括部
デジタルソリューション部
サーバサイド・インフラエンジニアグループ

シニアエンジニア 春日 善信氏



社内のデータ共有を円滑に行えるシステムを整備し、よりよいサービス提供につなげたい

転職サービス「doda」などを提供するパーソルキャリア株式会社では、高いセキュリティレベルでのデータ相互活用を進めるため、Denodoを導入しました。転職希望者や企業により良いサービスをこれまで以上の精度でスピーディーに提供するため、各データに対するユーザー権限を適切に管理しながら社内での利用部門を拡大しています。

各部署が持つデータを相互活用できる基盤を構築したい

パーソルキャリア株式会社（以下、パーソルキャリア）では、人材紹介や転職・採用支援サービスを提供しています。

「候補者と企業のマッチングにおいて、さまざまな施策を行っています。膨大なデータを元に、求人情報への応募率や応募者の書類通過率などを見ながら、よりよいマッチングのための検証をしています」（寺本氏）

このベースとなるのがパーソルキャリアに登録されている転職希望者と企業のデータです。「doda」の累計登録者数679万人（2022年2月時点）。転職活動を行う期間は約3ヶ月で、その間に数万件ものユーザー情報が蓄積されていきます。

「オンプレミスを含めデータウェアハウスは複数あり、それを部署ごとに適切に管理し活用している状況です。そのため、例えば他部門のデータ活用や加工を行うには、一度コピーを作成する必要があります」（寺本氏）

コピーの問題点は、データ量が増えてしまうだけでなく、管理上の課題も生じるため、パーソルキャリアでは、安心してデータの相互活用が行える仕組みを模索してきました。

「管理上、他部門が収集したデータについて、権限を越えた活用はできません。ただし、利用可能な部分やデータが重複する部分などもあります。そのため、ソースごとに閲覧できるデータの範囲を制限したり、部門や部署の権限に応じてデータを活用できるサービスを探していました」（春日氏）

接続できるソース数と疎結合が決め手に

そこでパーソルキャリアでは、ソリューションの調査を開始しました。

「データ仮想化に注目して調査するなかで、2019年頃Denodoについて知りました。仮想化により、データレイクに集約したデータ同士がデータソースと密結合にならずに利用できることが、社内のデータ活用におけるシステム構成に活かせるのではと考えました」（春日氏）

比較検討の結果、最終的にDenodoに決定した理由を寺本氏は次のように述べます。

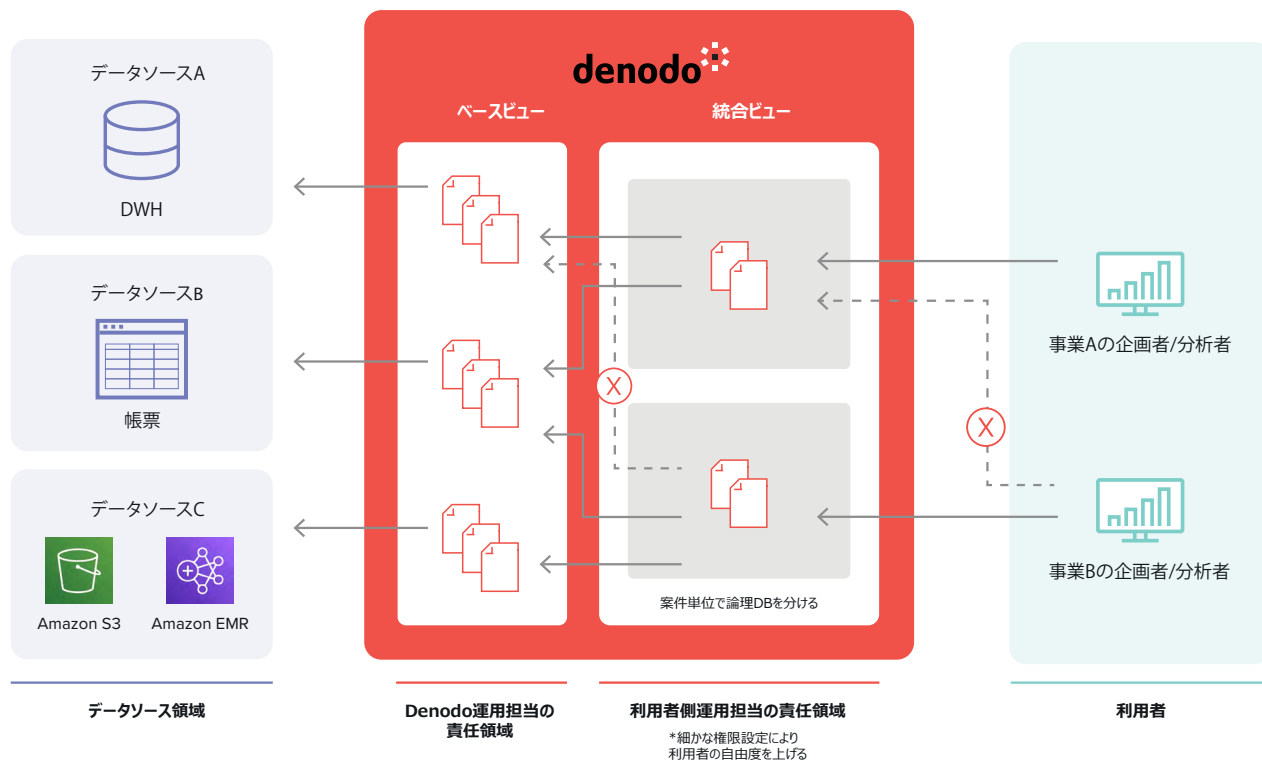
「接続できるデータソース数が最も多かったこと、データ同士が疎結合であること、また各データに対する利用制限が容易に行える点が、我々のやりたいデータ管理上のガバナンス強化に大きく寄与すると考えました」（寺本氏）

パーソルキャリアでは2020年の8月にPoCを実施。60に及ぶ項目について、細かなチェックを行いました。想定しているガバナンス通りの利用が可能か、権限の各種設定、認証といった部分にフォーカスし、実際の利用想定した検証を行いました。

「データ活用では、データオーナーの意図を十分反映できることが重要です。データをマスクする設定がどれくらい細かく行えるのか、また設定が容易かどうか検証しました。設定については、実際にデータを扱う管理者がエンジニアとは限らないため、特に運用面については詳しく検討しました」（寺本氏）

「データ権限やアクセスコントロール、接続性、データリネージュなど、細かく検証しました。重要なポイントのひとつは、データの出自が可視化できる点です。コピーによって元のデータがどれか分からなくなることもありますが、Denodoでは可視化されるので、安心して利用できます」（寺本氏）

機能面の検証結果を元に、ETLにおけるコスト削減効果も見込まれるとして導入が決定しました。



工数削減でコストメリットも。データ管理者の負担も最小限

パーソルキャリアではDenodoの導入を2021年9月に決定。11月からシステムの構築をスタートしました。現在は各データベースを接続し、細かな調整を行っている段階です。

「物理データレイクにETLツールでデータを入れる処理を行っていましたが、Denodoの論理データレイクを活用すると論理的定義が可能となり、ここが非常に簡単になります。工数削減につながるのでコストメリットがあると考えていましたが、実際にかなりの効果がありました。一例を挙げると、データ共有のために開発が必要なケースで、40時間程度かかっていたものが4〜5時間に短縮されました。90%近い削減率なので効果として非常に大きいです」（寺本氏）

また、Denodoの論理データレイクにデータが集約されることでデータ活用が進み、業務におけるデータ活用の可能性が高まっています。

「権限付与についても、管理するエンジニアの介在をできるだけなくしたいと考えていました。利用が進むにつれて管理の負荷が上がるためです。Denodoでは行や列単位で閲覧権限を設定するマスター機能があり、エンジニアではない業務担当者でも細かい閲覧権限の設定を容易に行えるので、管理の負荷を増やさずにデータ活用を拡大できます」（春日氏）

更なるユーザー体験の向上を目指して

Denodoの導入によって、パーソルキャリアでは今後、統括的なデータ管理を行い、部署を横断してデータ活用できるようにしていきたいと考えています。

「今は全社的なデータの利活用を広げていくための基盤整備ができた段階だと思います。次はフロント部門から利用事例を増やしていきたいです」（寺本氏）

社内にあるさまざまな業務システムのなかには、まだDenodoへの接続準備が整っていないものも多くありますが来期以降の本格運用を目指しています。

「すべての部署が持っているデータの活用範囲をすぐに広げるのは、技術的な面だけでなく、コンプライアンスやサービス利用者への説明など、必要な準備が非常に多くあるため、一足飛びにはいかない部分もあります。今はいくつかの部門で利用を始めたところですが、システムを利用したい部門があればどんどん加わってもらい、活用の幅を広げてきたいです」（春日氏）

データの利活用を進めた先には顧客体験の価値向上があると、寺本氏は話します。

「転職希望者、企業それぞれに対して、より確度の高いマッチングが行うことが我々のミッションです。複数のデータをデータレイクにまとめ、システムをつなぐことで、これまで別々だったデータの掛け合わせが可能になります。そこから、よりマッチングの精度を高められるしくみを提供できるよう、今後もDenodoを中心としたデータの利活用を進めていきたいです」（寺本氏）

